

# 愛のカタチ

私のおじいちゃんは不思議すぎる。今まで料理もまともに作れなかったのに、なぜか急に練習するようになった。定年までずっとタクシーの仕事をしていたのに、全く関係ない介護の資格をとろうとしている。考えても考えてもおじいちゃんの心は謎だらけ。そろそろ探偵でも雇いたい。

高一の冬、やっとおじいちゃんの謎が解けた。全てはおばあちゃんのためだったのだ。

私のおばあちゃんは、パーキンソン病という病気でもう言葉をしゃべることができず、一人では動くことも出来ない。私の事も忘れてしまっている。

おばあちゃんは元々入院していて、様々な病院に行っていた。おじいちゃんは毎日毎日病院に来ては、ご飯を食べさせていた。そしておじいちゃんは親戚たちを呼んで、こう宣言したのだ。

「おばあちゃんを家に連れて帰る。愛しているから最後まで面倒を見たいんだ。」

周りからの反対を押し切り、高二の春、おじいちゃんは介護を始めた。初めは下手だった料理も、いつの間にかまるで料亭で修業しました、と言われてもおかしくないほど上手になっている。おむつを替えてあげたり、お風呂に入れてあげたりと大忙しだ。

「毎日けい子さんと居れて楽しいよ。」

その言葉を聞いて涙が溢れ出た。二人の本当の愛のカタチを見たと思った。昔からずっと支えられてきたから今度は支える立場になりたいというおじいちゃんの気持ちが伝わってきた。

今でもおじいちゃんは介護を続けている。おばあちゃんは家にいる方が良く笑う。それはおじいちゃんという存在がいるからだと思っている。実はおばあちゃんも昔、私にこう言っていた。

「私はこうじさんを愛しているんだよ。」

いつまでたっても二人は相思相愛のままである。